



ウィリアム・C・フォークナー（1825–1889）研究
：
その生涯と二つの長編小説『メンフィスの白い薔薇』と『れんが造りの小さな教会』を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相田, 洋明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017082

ウィリアム・C・フォークナー(1825-1889)研究 ——その生涯と二つの長編小説『メンフィスの白い薔薇』と 『れんが造りの小さな教会』を中心に——

相 田 洋 明

アメリカ南部のノーベル賞受賞作家ウィリアム・フォークナーに、同じファースト・ネームを持った曾祖父がいて、この曾祖父がヨクナパトーフア・サーガの中心人物である、ジョン・サートリスのモデルになっていることは比較的知られていることであろう¹（なお、曾祖父のラスト・ネームのつづり字は、uの入っていないFalknerである。以降、曾祖父については主としてウィリアムと呼び、ひ孫の方はフォークナーと呼ぶことにする）。実際、曾祖父は北ミシシッピでは伝説的な人物で、フォークロアの書物にも登場する²。

本論では、この曾祖父の生涯をたどり、彼が書いた二つの長編小説の内容を紹介することで、曾祖父の作品とフォークナーの作品を比較考察するための基礎作業としたい。

まず、主としてDuclos[1998]とWilliamsonによりながら、曾祖父の生涯をたどる。

ウィリアム・C・フォークナー（William C. Falkner）は、1825年7月テネシー州に生まれた。その後ミシシッピに移り住み、1845年には、ある一家を惨殺した殺人犯の男の生涯を、本人からの聞き取りに基づいてパンフレットにして、死刑執行当日に売り出し、大儲けしたと伝えられる。1847年1月メキシコ戦争に志願し、4月左足と左手を負傷する。7月にホランド・パースと結婚し、10月に軍隊を除隊。ミシシッピ州ティッパー郡のリプリーで弁護士業を営み、翌48年9月に長男が生まれた。

この頃までは戦争での負傷があったとはいえ——もっともこの戦傷についても、実はいきさつが少し怪しく、軍事作戦中に撃たれた

のではなく、メキシコ人女性に会いに行く途中で撃たれたようである——、比較的順調にウィリアムの人生は推移していた。しかし翌49年5月に地元の有力者であるハインドマン家の長男ロバートを、正当防衛によるものとはいえ、殺害したあたりから、ウィリアムの生涯を特徴づける激しい争いと対立の要素が現れてくる。同じ月に妻を亡くした。1851年にはハインドマン家の支持者であったモリスという男を、これも正当防衛ではあったが、刺殺した。同じ年に再婚。そして注目すべきことに、この1851年、メキシコ戦争に材をとった長編詩 *The Siege of Monterey* (『モンテレーの包囲』) と中編ロマンス小説 *The Spanish Heroine* (『スパニッシュ・ヒロイン』) を出版している。比較的早い時期から、ものを書く人間という側面がウィリアムにあったことが分かる。1861年、南北戦争が始まると南部の男として当然参戦し、有名な第一次ブルランの戦いで輝かしい活躍をした。戦争が終わった後もウィリアムは死ぬまで大佐と呼ばれることになる。

そして、1864年半ば頃、ウィリアムの所有する女性奴隷であるエメリンが女兒を生み、ファニー・フォレスト・フォークナーと名付けられる。このファニー・フォレストがウィリアムの子どもであること、そしてウィリアムはエメリンとファニーをいわばもう一つの家族、シャドウ・ファミリーとして終生養育したことを明らかにしたのが、1993年のウィリアムソンの研究³であり、フォークナー研究者に衝撃を与えた。奴隷主の白人が黒人奴隷に子どもを生ませる、つまり異人種混淆がフォークナーの家系にも現実发生过っていたのである。

さて、南北戦争後ウィリアムが熱意を燃やしたのが、北ミシシッピにおける鉄道敷設事業であった。1872年には北部ミシシッピに26マイルの鉄道を開業する。そしてこの後、リチャード・サーモンドという人物と共同で鉄道事業を継続してゆくことになるのだが、ウィリアムは結局このサーモンドに撃たれてその生涯を終えることになる。

1880年代に入ると作家活動も再開し、1881年に出版した *The White Rose of Memphis* (『メンフィスの白い薔薇』) は当時のベストセラーになり、20世紀初頭まで売れていた⁴。1882年には二つ目の長編小説 *The*

Little Brick Church (『れんが造りの小さな教会』) を出版、1883年には娘を連れてヨーロッパを旅し、その旅行記を雑誌に連載。翌1884年に *Rapid Ramblings in Europe* (『ヨーロッパ駆足漫遊記』) として出版した。マーク・トウェインの *The Innocents Abroad* の伝統に連なるユーモアあふれる旅行記である。例えば、イギリスでシェイクスピアの生家に行ったときには、自分用のお土産にと、シェイクスピアが生まれた部屋のドア・ストッパーを失敬してポケットに入れようとしたところを、ガイドの女性に注意されたりしている⁵。

晩年には政治の世界にも進出し、1889年11月には州議会議員に当選するが、その当選した日の夕方サーモンドに撃たれ、翌日息を引き取る。享年64。偶然であるが、ひ孫のフォークナーも同じ年齢で死去することになる。

さて、では曾祖父の長編小説二編の内容に入ろう。1881年に出版された『メンフィスの白い薔薇』は、先にも述べたようにベストセラーになった小説で、全41章とエピローグからなる大長編である。

ミシシッピ川を航行する客船「メンフィスの白い薔薇」号の処女航海の前夜、豪華な仮面舞踏会が開かれ、メアリー女王やアンリ4世、アイバンホーやインゴマル⁶といった歴史上・物語上の人物に扮して、人々が参加している。そして、彼らはお互いの素性を知らぬまま、航海中も仮面をつけたままであることにする。退屈しのぎに順に話をすることになるが、結局インゴマルが語る話に皆がひきつけられ、彼の語りが続くことになる。

インゴマルの話の内容は、「私エドワード（このエドワードがインゴマルの本当の名ということになる）はテネシー州ナッシュヴィルで生まれ、6才の時母が死に、8才で父が再婚。1才年下のハリーと2才年下のシャーロットときょうだいになります。5年後、父が死に、すぐに母も死にます。そして3人はメンフィスに住む母のきょうだいのもとへと旅立ちました」と始まるもので、以後三人が協力しながら危機を乗り越え、波瀾万丈の冒険ロマンスが展開される。そしてインゴマルが物語を語る間に、船の上でも様々な事件が起きる。そして最

後には、インゴマルの物語に登場する人物たちが、実はインゴマルの物語を聞いている、仮面舞踏会の参加者たちであることが分かり、物語と現実が一致することで小説は収束する。例えば、メアリー女王は実はシャーロットで、アンリ4世は実はハリーだったのである。物語では生き別れになったエドワードとシャーロットは、この船の上で結ばれる。

この小説の面白さは、何よりも物語と現実の二重性が、最後に一つにまとまる場所である。ヴァン・ウィック・ブルックスは『メルヴィルとウィットマンの時代』のなかで、この二重性を、アメリカ南部が持つ二重性、すなわち、ロマンチックな自己像と現実、ロマンスとリアリズムの二重性を表現したものとして評価している⁷。作品のテーマとしては、きょうだいの間の近親相姦的な愛が目立つものとも言える。一方、南北戦争の記憶も新しい1881年に出版された作品であるが、南部擁護と北部批判といった要素は見当たらない。これがベストセラーになった一つの要因かもしれない。

一方、次に検討する『れんが造りの小さな教会』には、北部批判が満ち満ちている。こちらも全29章の堂々たる長編であるが、ほとんどどこにも、英語でも日本語でも、紹介されていない。

『れんが造りの小さな教会』は、1850年5月、南北戦争勃発の11年前、シンシナティから仕事でニューヨークを訪れた弁護士の「私」が、もうすぐ100才になるバーナードという老人から、独立戦争時代の悲恋の話を書くという設定で、フレーム・ストーリーになっている。

1757年4月10日、同じ日に、オスカーという男の子とオリビアという女の子が生まれた。オリビアの母は生後すぐに死んでしまったので、オスカーの両親が彼女を引き取り、二人はきょうだいのように育つ。以後、オリビアの出生の秘密などを巡り、ロンドンまで舞台を広げて、また独立戦争の史実も絡めて、オスカーとオリビアのラブ・ロマンスがこちらも波瀾万丈に展開する。

先にも述べたが、この作品が『メンフィスの白い薔薇』と大きく違うところは、バーナードの口を通して、奴隷制に対する北部の責任が

厳しく追及されることである。奴隷を狩り集め、奴隷船で輸送し、南部人に売って大儲けしたのは北部人なのに、今になって南部人を非難している、と。そして、北部の奴隷所有者の奴隷たちに対する残虐さや性的関心、また、奴隷船のなかでの虐待についても、相当なページを割いて描写している。

テーマとしては、こちらもきょうだいの間の恋愛が扱われている。オスカーとオリビアは、生まれた時から同じ親のもと同じ家で育っているので実質的にはきょうだいの関係と考えられる。

語りの手法に工夫があるのも二つの作品に共通している。『れんが造りの小さな教会』はフレーム・ストーリーになっていて、そのフレーム・ストーリーのなかにさらにストーリーが含まれている部分がある。19章と20章で、そこでは奴隷船での奴隷の男女の愛が語られていて、オスカーとオリビアの愛の一種のサブプロットのように機能している。どちらのカップルも、男女が同時に死ぬことになる。

さらに、足に障害をおった人物がヒーローとして活躍するというのも面白い特徴である。オスカーを助ける靴屋の青年は片足が義足であるし、皆に一目置かれている退役兵は片足を失っている。ウィリアム自身、メキシコ戦争で足を負傷して障害が残ったとして年金を受け取っていたのであった。(もっともこの年金受給に関しては、ハインドマンからクレームがついて、後遺症は残っていないのに虚偽の申告をして、年金を詐取していると訴えられている。後に彼のひ孫のフォークナーが、戦場に出たことさえないのに、第一次世界大戦が終わった後、杖をつき、足をひきずって帰郷したことを思い起こさせるエピソードである。最近、ディサビリティのテーマに注目が集まりつつあり⁸、さらなら分析が可能かもしれない。)

以上ウィリアム・C・フォークナーの生涯を略述し、二つの長編小説の内容を吟味した。上で指摘した、きょうだいの間の恋愛(フォークナー作品で言うなら、『響きと怒り』のクエンティンとキャディがすぐに思い浮かぶだろう)、語りの手法、ディサビリティのテーマなどについて、曾祖父の長編小説とフォークナーの作品を具体的に比較

することを次の課題としたい。

*本稿は、日本アメリカ文学会関西支部2015年9月例会（2015年9月5日、神戸女学院大学）での口頭発表に基づく。

注

1. 日本でも、仁木勝治『アメリカ南部社会の寵児 ——フォークナー 大佐の悲劇』という書物が出版されている。
2. B. A. Botkin, ed., *A Treasury of Southern Folklore*, 379-381.
3. Joel Williamson, *William Faulkner and Southern History*, Oxford University Press, 1993.
4. 1953年に*The White Rose of Memphis*がColey Taylor社から再版された際に付された、Robert Cantwellの“Introduction”による。
5. William C. Falkner, *Rapid Ramblings in Europe*, 79-80.
6. インゴマル (Ingomar) は、Maria Ann Lovellの戯曲*Ingomar the Barbarian* (1851年初演) に登場する古代ゲルマン族の族長の名。
7. ヴァン・ウィック・ブルックス『メルヴィルとウィットマンの時代』、367-368頁。
8. 例えば、Taylor Hagood, *Faulkner: Writer of Disability*, Louisiana State University Press, 2015.

文献

- Cantwell, Robert. “Introduction.” *The White Rose of Memphis*, Coley Taylor, 1953, v-xxvii.
- Botkin, B. A., ed. *A Treasury of Southern Folklore: Stories, Ballads, Traditions, and Folkways of the People of the South*. Crown Publishers, 1949.
- Duclos, Donald Philip. “Colonel Falkner—Prototype and Influence.”

- The Faulkner Journal*. 2. 2 (1987): 28-34.
- . *Son of Sorrow: The Life, Works and Influence of Colonel William C. Falkner 1825-1889*. International Scholars Publications, 1998.
- Falkner, William C. *The Little Brick Church*. J. B. Lippincott & Co., 1882. Rpt. Literature House, 1970.
- . *Rapid Ramblings in Europe*. Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1884. Rpt. Nabu Press, 2010.
- . *The White Rose of Memphis*. G. W. Carleton & Co., 1881. Rpt. Coley Taylor, 1953.
- Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. Oxford University Press, 1993.
- ヴァン・ウィック・ブルックス著、『メルヴィルとウィットマンの時代』、石川欣一訳、名著普及会、1987年。
- 仁木勝治、『アメリカ南部社会の寵児 ——フォークナー大佐の悲劇』、文化書房博文社、2007。